
「時効不成立」 11

長根兆半

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「時効不成立」

11

【Zコード】

Z3002F

【作者名】

長根兆半

【あらすじ】

狭間は突然現れた鈴城と外に出た。冷たく乾いた風が、一人を撫でるように吹き、何処と言つて行く當てもなく歩き出した。狭間はこの先に鍾乳洞の広場が有る事を思い描き、キャラバン生活を思い、そこへ向つよう、言葉もなく歩いた。

第10章 檻のない服役

「時効不成立」 11

第10章 檻のない服役

店から狭間と鈴城の二人は外に出た。

冷たく乾いた秋風が、二人を撫でるように吹き、何処と言つて行く当てもなく歩き出した。

狭間はこの先に鍾乳洞の広場が有る事を思い描き、キャラバン生活を思い、そこへ向うように、言葉もなく歩いた。

「ツアード?」

「一人だよ」

「仕事?」

「いや・・・・・・・」

「・・・なんで・・・・」

「山の神に会いに・・・それで、来た」

鈴城は、何を何処から話したらしいのか、分らないまま、狭間の傍を歩いた。

二車線の舗装された道は、住宅街らしく、街頭はあるものの、葉のない枝ぶりの目立つ鈴掛けの大木が道を覆っていた。

街灯に明るく照らされている交差点を左に行くと、そこの中下は、鍾乳洞の入り口で、広場になつている。

時間的に鍾乳洞は閉鎖していたが、入り口にあるパブは開いていた。何人かの若者のカップルがパブの中に居たが、鈴城と狭間は外の野外テーブルに、どちらからともなく座った。

「あの時の加護坊山、思い出すな。ここ」と鈴城が言った。

二人が育つた宮城県の広大な穀倉地帯の大崎平野には、シンボルのような加護坊山があつた。

標高一一四メートル。その山の東の裾に、小さな沼があり、その沼の土手を行くと、砂岩の壁がそそり立っていた。

その砂岩の根を清水が流れ、そこには山椒魚が生息していた。

その探検に中学一年生の鈴城広州が、小学三年生の狭間良孝を連れて行つた事があった。

鍾乳洞を目の前にして、鈴城がその事を言つたのだと、狭間は解っていた。

「あの絶壁を登つて、アケビを取つたの、覚えているか？」

「覚えている」

「何時だつたかな、山の神が言い難そうに、これ欲しこって言った事があつたが、何が欲しくて言つたか、それも、覚えているか？」

「知つてゐる、昆虫採集のセットだった」

「それと虫取り網も、な」

「コンペ、どうしていきなり来たの？」

「電話貰つて、今会わないでいると、死ぬまで会えない気がしたから」

「俺、そんなつもりでしたんじゃなかつたんだが」

「いいじやないか、どんな訳が有つても」

「俺ね、コンペにだけは言いたくて・・・他に、他に話せる人が・・

・・・それで」

「いいよ、昼にあの店で見かけた時、ああ幸せにやつてるなと思つたよ」

「幸せ・・・か」

「昔の再現、と言つたか、続きをやつてるなつて気がしたよ」

「何の事だ？」と狭間の山の神は、とぼけ加減に言つて後悔した。

「米盛勇夫、覚えているか、当時の仲間は、あいつと俺だけになつたんだ」

「覚えている、キャッチャーの田ネヤンだろ」

「あいつ、高校を出ると、警察官になった。山の神が五年か十年に一度電話をよこす事で、あいつが言う話が俺の中で繋がつたんだ。」

本当に早いな、五十年前が昨日のようだよ」

狭間は、なぜ鈴城広州がハンガリーに来たのか、解った。

「加護坊山で、酒もタバコも、山の神に教えたのは、俺達だつた」

「・・・・・」

「蕨やゼンマイを探つた事もあつたな。野うさぎを追いかけた事も有つた。板を削つただけのスキーをやつた事も、どうしてだろうな、いつも山ノ神とそんな事をしていたのは・・・。どうして山の神つて言うようになったか知つてるか?」

「うん、小牛田の山ノ神神社で飼つていたサル、あの真似をして以來だつたはずだよ」

「そうだな。あの時、俺達下級生は、先輩にじこかれ、野球の道具を片付ける時間になつて、鬱憤晴らしにふざけていた時だつた。バツクネットの裏で見ていた山の神をからかうつもりで呼んで、やってみると言つたら、何のためらいもなくやつた。爆笑だつたな」

「うん・・・・」

「あれ以来、良孝の事を、山の神つて呼ぶよになつた」

「でも、どうしてコンペだけ、俺をかまつてくれたんだろ?」

「多分、お前の兄貴の事があつたからだと思うよ」

「ヤサグレが、あれがどうして・・・と狭間は吐き捨てるように言つた。

「お前の兄貴は、とにかく喧嘩が強かつた。というか乱暴だつた。毎日のように誰かとやつていたと思う。それで俺の親父が、知つてゐるか、神社の神主をして、町の少年觀察委員をしていたんだが、小学上級生のお前の兄貴の觀察員になつて、親父は誰に言つとも無く言つているのを聞いたんだよ。なぜ俺の前で親父が言つのか解らないながらも、山ノ神を見て居たくなつていたよ。因果だな」

「・・・どんな?」

「もう解つてゐるんじゃないのか?」

「・・・・・・」

狭間は、急に涙がボロボロ流れて来るのを、拭う事も出来なかつた。

鈴城は、それを見ぬふりをするよつこ、椅子に座つたまま、狭間に背を向けた。

鈴城は、狭間と同席していた女性は、三十五年前の遊茶美枝子なかもしれない。と思つた。

「山の神、果報者ンだよ。良かつたな」

「・・・・・」

鈴城は、そう思い、そして神のみぞ知る正当防衛かもしれない。と言いかけたが、言えれば責めることになりそうで、これを噛み殺したのだった。

「何時来たの？」

「一週間の予定で来て、明日帰る」

「明日・・・・？」

「日本語で、話し相手、いるのか・・・・？」

「・・・・・・・・」

「日本には、帰らないのか・・・・？」

「・・・・・・・・」

「見送りなんかするんじやないぞ、本当の別れになつてしまふから・

・・・と鈴城が言つた。

「・・・・・・・・」

「古川の「上総」に居たんだつてな。こつちへくる時、見に行つたが、駐車所になつていたよ」

「・・・・・・・・」

「あの子が、去つたら、どうするんだい。行く所、有るのか？」

「・・・・・・・・共同で買った、家だから・・・・」

狭間は、募る話も語りたい事も、聞きたい事も、山のよつてある気がしたが、言葉にはならなかつた。

そして、ヤランチカ・クシイーバの居ない未来は、ただ真つ白になつていたのだった。

「これでも、まだ山の神をかまつて居るんだ。だから・・・」

「な」と鈴城が言つたところに、クシィーバからの電話が鳴つた。

鈴城は、狭間良孝の電話が終わるのを待つて、自殺だけはするなよ、
と言いたした。

狭間良孝は、閉じた瞼から、なお流れる涙が止まらず、歯を食いしばっていた。

鈴城広州はその狭間良孝を田の端で捕らえながら、これ以上の話は何を言つても、責める事にしかならないと思うと、自分も辛くなつていいくのだった。

「コンペ、俺のような生き方が有つたって、いいよな」と狭間は、ボソリと言つた。

「ああ、いいよ・・・・世界一だ」

狭間良孝は、家にどうやって帰つてきたのか、鈴城広州と何時別れたのか、何も思い出す事が出来なかつた。

深夜、クシィーバが帰つて来たのを、いつものように迎え、言葉少なにそのまま、ベットで抱きしめ、眠りに着きたかつたが、「リョウ・・・なぜ、なぜ泣いてる」とクシィーバに聞かれた。

が、そのまま朝を迎えたのだった。

目覚まし時計を見ると、鈴城広州が日本へ発つた時刻だった。

そして、クシィーバをこのままに、叶わぬ事とは知りながら、日本で死にたい、と思つた。

Hピローグ

鈴城広州は、成田空港から、東北新幹線に乗ると、新古川駅でバスに乗つた。

石巻の自宅には帰らず、そのまま大貫の米盛勇夫を訪ねたのである。鈴城は、大貫から古川の途中にある小牛田の学校まで、毎日通つたが、古川の町にくる事は、めつたになかった。

それでも、見慣れた風景を思い出すのだが、既に分るところは地名しかなかつた。

古川からバスに乗り、江合川を渡ると、左右に田園が広がっている。田園が切れると、田尻の町に入り、しばらく商店が続く田尻の町の中をバスは走つた。

やがて東北本線の田尻駅前に着き、そこから先が沼部という地域で、その先が大貫だつた。

ああ、あの土手が切伏沼だなと見当をつけ、一人で筏を浮かべ、ジユンサイを探つてゐる時に、何かの拍子に水に落ち、上がつてくると水垢が真つ黒に体に着いて驚いた事を思い出した。

バスはやがて、加護坊山の裾に当る大塩部落に來た。

鈴城は、この辺で山の神の親父が事件を起こしたのかと、米盛勇夫の話を思い出した。

緩やかな坂を登り下りしながら、曲がりくねつた山間の道をバスは走つていく。

森や林の中に点在する家々が、昔と随分変わつたな、と鈴城は思い、高校卒業以来、この道を通つた記憶がなかつたことを改めて確認する気持ちになつた。

大貫から石巻に転居する時も、加護坊山を挟んで、向こうの道から涌谷へ出て、石巻に行つたから、かなりの時の流れを感じた。

バスは大貫に來た。ここから十分ぐらいで、米盛勇夫の近くの停留所だつた。

古川から連絡すればよかつた、と思いながら時計を見ると、もう一時だつた。

バスから降りると、さすがに空気は冷たく、バス停から林を抜けると、冬枯れに入った田園が、どこか荒涼とした感じで広がつていた。澄み切つた抜けるような空と田園、鈴城は林に沿つて歩き、その広大な田園を眺め、米盛勇夫の家へと急いだ。

鈴城が庭先に立つと、孫と遊んでいた米盛勇夫が驚いて駆け寄つて

きた。

「何時帰ってきたんだい」と米盛は孫の手を引いて笑顔で言った。

「今朝、成田に着いて、そのまま来てしまった」と鈴城は言いながら、米盛と並んで家に入った。

「どうだつた、ハンガリー」と米盛は鈴城が居間に座ると同時に聞いた。

鈴城は、見てきた街を語り、綺麗だつたと言つと、

「山の神、加護坊山と似たような所で生きていた」と呟いた。

そして、山の神は、自分で刑に服していた。

と、独り言のようにいつた。

「どういう事……？」

「あいつに、逃げる事を教えたのは、俺達、否、俺かもしれない、最も多感な時期に、俺は、あいつに、逃げ場を作つてしまつっていたかもしだれない」

「なんだか、話が見えない、詳しく話してくれよ」

「家を買って、女と暮らしているようだつた」

「凄いじやないか、でも、よく会えたな」

「ん、ホテルで、どうしたものかと考えていたんだが、方法はない、ハンガリー語は、ローマ字読みに出来ても、意味が解らないから、どうしようもない。あいつ、板前だから、たまには、日本レストランに行くだろうと、何件かの所に行つて聞いてみたんだ。すると、新しく出来ると、必ず顔を出すという事が分かり、丁度最近出来た店が有つたから、そこへ行つた。「琵琶湖」と言う店だった。

店の者に聞くと、ここへはまだ顔を出していないから、そろそろ来るかもしれない、厭だなあ、とか言つていた。そこへ俺は、四日間、昼夜と通つて、五日目の昼過ぎ、とうとう現れた。念じるように待つた

「その念力が効いたと言つ訳か」

「最初に見た時は、声を掛けなかつた。女と一緒に言つ事も有るが、どんな話をするのか、それを聞きたかったからなんだ」

「若い女かい」

「若い、一月ばかり前、違う男と暮らし、戻ってきたようだつた」「良くそんな女と・・・いくら若いと言つても、ちょっと並みじゃできないな」

「出来ないが、許さざるえない・・・と言つていた」

「山の神がか、何もそんな女手元に置かなくつても、いくらでも居るだらう?」

「ああ、俺もそうは思つてみたが、奴の話では、例えどうであれ、これを失えば、もう誰も居ない・・・そう言つていたよ。人は一人じや生きていけないつて言う意味、シミジミと解つた気がしたな」

「うーむ・・・・それが、刑に服している、と言つことになるのか?」と米盛はそう言つて、随分と前、罪と罰とでも言つ自分の話を鈴城広州にした。

「死刑には、反対なのか」と鈴城が聞いた。

「はつきり反対か、と聞かれても、何とも言えないが、死ぬより辛いと言う事だけは、言えると思うが・・・」

生活環境の一つ一つを削除していく環境に、一人の人間が封じ込められた時、人間はどれ平静を保つて、生きていけるだろうか。

米盛は、死刑制度を超えたところで考えても、気が狂いそうになつた事を、鈴城に語つた。

「まったくあいつの居る環境は、自分で、そうしているとしか俺には、思えなかつた。板前に、言葉は要らないとか言いながら、その腕だけで歩いて、人渡りも下手、外国で二十年近くも居れば、それなりに言葉は覚えるだらうが、立つ足場が違えば、腹を割つた話まで、出来るわけがない」

鈴城は、言つてポケットからハンカチを出し、手の汗を拭いた。

「刑罰の存在を考えた時、他人を殺し、他人の人権を奪つた者に、果たして、自己の人権を主張する権利が許されるのだろうか。もし、あれば、死刑は出来ない事になるが」と米盛が言つた。

「そうだな、生きると言つ生存権だけは、認めるとしても」と言つ

て鈴城は山ノ神こと、狭間良孝の現状を米盛に語り継いだ。

「塙のない牢獄……か」と米盛が呟いた。

「狭間、山の神は、既にその罪に服している。桜田門を中心に、人間を見てはいけないよ」と鈴城が言い添えた。

そして鈴城広州は、例えそれが神の許しを得た正当防衛であるにしろ、山の神は、犯した罪に対し、何時何処で、どんな償いをするのだろう、出来るのだろうか。と思つて、口を閉じた。

「被害者や遺族にすれば、加害者に對し、同等の結果として死刑を望むが、どれだけの正当性があつての事なんだろうな。加害者は自らの手で人を殺し、被害者側は法に拠つて殺す。死ぬ氣で殺す。これがまかり通りそうな気がして、怖いな」と米盛は腕を組んで唸つた。「弱肉強食という面からすると、これも、自然の為せる事なのだろうかな」

「一見人為的な事だが、もしかすると、そうかもしれない。殺そうとしても殺せない、死のうとしても死ねない。人為的な事も何かがそれを阻止している場合もある」

「かといって、野放団にするわけには行かない。ヨネが言うように、生活条件の拘束をしていくと、俺は、死刑より恐ろしいことになる。そんな気がするよ」

「考えていくと、死刑という言葉すら、何か、影が薄くなるな」

「死刑反対の声を上げている連中は、社会復帰の望みを託した、温情論者なのかな」

「どうなのかな、いずれ、甘いと思うが……」

二人は、狭間良孝の現実を思うと、やりきれなさに胸を突かれ、言葉が途切れた。

家の台所から、カヤカヤと賑わいの声が聞こえて来た。

その声に、二人は救われた気がした。

「死刑賛成は、これを極刑と思っているが、その思考範囲は何処までも、対岸の火事から出ることはない。そう思うよ」と鈴城が思い

出したように呟いた。

「死刑制度が、一種の慈悲からとなれば、法務大臣も、判子、押し易いかな」と米盛が言って、大きな溜息をついて窓に手をやつた。部屋の明るさが、窓に反射し、外は見えなかつた。嫁の、新米の餅が出来たから、一緒に食べましょう、といつ声がした。

そして障子の外に、小さな足音がしたと思うと、坊主頭に赤いほっぺの、ドンブクを着たさつきの孫が入つて来るなり、こんなにちは、と鈴城広州に向つて、ペコリと頭を下げる

「おじいちゃん、お母さんの作ったズンダ餅、早く食べよ。お姉ちゃんも、お父さんも、皆待つてゐるよ」

鈴城広州は、山の神には、こんな思い出があるのだろうかと思い、孫の手を取る米盛勇夫の後ろから部屋を出た。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3002f/>

「時効不成立」 11

2010年10月11日05時48分発行